

アニー・パイルとその作品「沖繩戦記」

足立 富美

Ernie Pyle and his *Last Chapter*

FUMI ADACHI

まえがき

昭和56年3月18日に、私はパイルの戦死の島、沖繩伊江島¹を訪れた。それは丁度彼の命日の1か月前の日であった。前日羽田を発って那覇空港に降り立った夕刻には、満天の星が匂うように美しい宵であったのに、その夜半から雨が降り始めて、伊江島へ出立の朝は、どしゃぶりの状態である。知り合の運転手と打合せ通りに、ともかく、早朝から出かけた。伊江島には宿泊所もあるけれど、島で泊るわけには行かぬので、最後のフェリーで戻らねばならぬと思う心にながされて、篠^{しの}つく雨もものかは、出かけたのである。しかし雨雲は暗く垂れこめて、視界はきかず、写真撮影には最悪の日和になった。

左手に雨にけふる海岸線も、美しさで有名なのだが、今朝はうらめしく思われるばかり、渡久地港²まで車を馳せた。海上を見はるかすと、緑したたる水差しの蓋^{ふた}さながらの姿をした伊江島が、眼前にくっきりと島影を現わしているではないか。

フェリーに乗る。そして刻一刻と島影をみつめながら、そのめざす島へ船が迫って行く時は、何か心のときめきを覚える程の興奮があった。次第に近づく島影をスナップに撮りたいと思

甲板に上ったところ、どしゃぶりの雨が、強い風を伴って甲板に打ちつけて来る。シャッターを切るために、甲板の端に立てば、ずぶぬれになる。傘をさせばカメラの操作ができず、ほとんど自分の不器用さと、不用意のため天を怨みたくなる心持。

仕方なく船室に下りて、片隅でスケッチ・ブックに描く事に決めた。写真が駄目なので、心眼に焼きつけてやろう。脳裏に刻みつけてやろうと、執念一途に鉛筆を走らせた。

このような緊急な折に、事物風景の特徴を一目でとっさに捕え、その特徴を軽妙に描きわかる技能は、これまた格別な鋭敏感覚を必要とするものであることを、いやでも知らされたのがこの伊江島の旅であった。

写生にも速度が必要なのである。島影は、また海上の眺望は、刻一刻に極めて速やかに、変化していくのであった。そこには進行がある。動いてゆくのだ。なるほど Moving picture の妙味がわかる気がしてきた。

戦死について

さて、パイルの戦跡は、伊江島波止場より10分以内の徒歩距離にある。東支那海に浮ぶこの北部の孤島にまで、彼は足跡をのぼしたのだ。

1 伊江島は沖繩北部の東支那海に浮ぶ孤島、パイルはここで戦死す。

2 渡久地港、沖繩中部にある港町、伊江島への航路の舟はこの港から出る。

はるけくも来つるものかな、地球上すべての戦線に従軍して、名筆を残し、この伊江島にて、日本兵の撃った機関銃弾についに倒れ、一瞬にして不帰の人となってしまった。彼の45年の生涯は、「国民的ヒーロ」の名にふさわしく、正にゆかしく悲劇の一生であったと言える。降りしきる雨も萬斛の涙のように、吹きつける風の音も、天もむせび泣く声のごとく思われる。寂漠とした2百坪位のこの空間に、彼の魂は安らかに眠ったであろうかと、私は瞑想にふけた。その時の心持は敵、味方を越えた境涯から湧き出る、深い無限の悲しみへつながっていった。私は肉親の戦死の地、沖縄南部の海辺に^{たがず}行ったその時、眼前に開けた穏かな青い海原を、はるかに眺めやって、沖縄戦の日々の熾烈さを想像すると同時に、定めし彼もまた、この海原の果ては、家郷に続いていることを想い、最後の瞬間、今生の別れとして、この海の果ての豊後水道の家が、脳裏をかすめたに違いないと、確信したのであった。日米同じく戦場で果てた身、そのうずきにおいて、差異のあろうはずはない。しかし、命終^{みょうじゆう}の際の心境には、雲泥の差があったのではないかと、推測されて仕方がなかった。

アニーパイル (Ernie Pyle 1900—1945) は米兵の死生観について率直に書いている。

Our soldiers still can hate or glorify or be glad with true emotion. For them death has a pang, and victory a sweet scent. But for me war has become a flat, black depression without highlights revulsion of the mind and an exhaustion of the spirit.

(我が兵隊達は今もなお憎んだり、栄光を求めたりする事が出来る、そして真実な感情でもって喜ぶことさえ出来る、彼等にとって死は疼きであり、勝利は芳香を放つ、しかし私にとっては、戦争は何のハイライトもない、平たい闇の中の意気消沈の状態となってしまった。精神の強い嫌悪感、そ

して魂の疲労困憊^{はい}。)

他方、日本側においても、1945年4月2日戦艦の「大和」が、若干の駆逐艦を従えて、沖縄戦救援のため、呉港を出帆し、かけつけた時の状況を、吉田満著「戦艦大和」³は詳述しているけれど、その文中において、著者は海軍少尉として戦艦「大和」に乗り込み、その「大和」の艦中にて、若き士官達の「死について」の議論が沸騰した際に、砲術士官白渕大尉の告白を記録に留めている。

「戦艦がこの最後の航海に入って、日本の岸をはなれると、これまで士官達を窒息させていた言論上の統制はいまやとれた。士官達は「何故、自分達は死ぬか?」の目的について、知り度いと皆考えていた。白熱した議論の只中で、痛烈なる必敗論をかたわらにして、砲術士官白渕大尉は次のように述べた。彼が言うには、「進歩のない者は決して勝たない。負けて目覚める事が最上の道だ、日本は進歩と言う事を軽んじ過ぎた。私的な潔癖や徳義にこだわって、真の進歩を忘れていた。敗れて目覚める、それ以外にどうして日本が救われるか?今、目覚めずして、いつ救われるか?俺達はその先導になるのだ。日本の新生にさきがけて散る。正に本望じゃないか。『実録太平洋戦争』p.214)」

と述べた。以上が彼、白渕大尉の持論であって、また連日士官室に沸騰した「死生談議」の一応の結論であった。あえてこれに反駁^{はんぱく}を加え得る者なしと著者⁴は結んでいる。

太平洋戦争勃発の最初から、海軍の要職を占めた人々の間には、白渕大尉のように、覚めた予見、予測が多く語られたことも事実である。国家の歴史をふり返ってみても、また小さい一集団の会社、学校の歴史を回顧しても、必ずしも正論が遵守されない、受け入れられない、むしろ、正論を吐く者は抹殺される空気が漂って

3 「戦艦大和」吉田満著、「大和」の最後の苦闘を記述した実録ドキュメント、中央公論社、発行。

4 ちなみに、著者吉田満は東京大学法学部出身の学徒出身士官であったけれど、徳乃島西方60米の海上にて、「大和」轟沈の際に、一旦は海中に投げ出されたけれど、救出されて後、日本銀行監事の要職にまで昇った人である。その死線を越えた実談記録に以上引用した証言がある。

いるのが、世界歴史の暗黒のよどみであろうか？ その場に臨み、命、旦夕に迫った士官達には、責任ある故に議論が百出して、遂には鉄拳の雨、乱闘の修羅場と艦上の士官室が化したことも、著者は附言している。

ここに「大和」の士官室の状況を追加したのは理由がある。当時戦艦は3,000人の将兵を乗せて虎口へ突入したのであるが、既に米軍は沖繩上陸を敢行した後のことである。今や惨澹たる敗戦に向わんとし、戦雲急を告げる沖繩戦局に、誰が戦況挽回を信じ得たであろう。必敗論の漲る艦中の事故、若き士官達の沸騰する「死観」が溢れ出たことももっともな事態である。その紛糾を制して、臼淵大尉は最初には「我々の出撃は、作戦上からみて、敵に何らの損害も与えないし、この際こう言う作戦は無意味であると思う。しかし、我々は、この作戦が無意味である事を証明するために死ぬのだ」と、述べたそうである。考えてみると、乗員一同の心中にあるもの、「死ぬだろう」ではなくて、「死なねばならぬ」の命題だけである。「集団戦死」を覚悟せねばならぬ際に、上述の大尉の言葉は、若き士官達を十分に説得しえず、「その様な無意味な死にはイヤだ、何か普遍的な価値に結びつけたいのだ。」と、学徒出身の士官達は承服しかねたそうである。そこで海軍兵学校出身の若き士官達が、「貴様達はそれでも日本人か？ その根性を叩き直してやる！」と、鉄拳をとばし、修羅場を呈したのであるが、死地に突入せんとして人間の胸中の赤裸々な葛藤が、いかばかりのものか、日本兵各自の命終の際の絶叫を、この描写から如実に悟ることができる。

他方、米兵の心の中にあつた恐れは、「死ぬかも知れない」なのであるが、日本兵最後の心中では、皆「死なねばならぬ」の命題だけがあつたのであるからそれでいて、なおかつ、臼淵大尉は、機械を操縦する部門の士官であつたために、各国(特に敵国の)科学の進歩も熟知の上で、諦念に達した後、悟るところがあつたのであろう。上述の引用文の通りの発言を行って、その場の紛糾をよく制した。そして最後には艦もろ共、乗組員3,000人ともども彼は海中に散つてい

った。

以上は一例を「戦艦大和」の最後に依つて、披瀝したに過ぎない。しかし玉砕した守備兵、戦死の将兵の心中には、最後は多かれ少なかれ、「死観」に対する葛藤があつたと考えられる。

ここでアニー・パイルに話を戻すと、新聞人として、第二次大戦の難所ごとに従軍したパイルには、心中怒号したい絶叫もあつたであろう。が、そんな時、彼は「自分としては口をつぐむより他に道がなかった。」と、述懐している。

そこで、現実の戦争を武器でもって戦わず、その修羅場を、身をもって体験したパイルには新聞人としての客観性と普遍性は、逆に大きく働いて、あれ程正確無比に、精緻を極めた報道が可能になった理由と考える。私はこれら両書を読破して見て、沖繩戦記の主観論と、客観論が真二つに別れた観のする記録に、真に胸にこたえる衝撃を感じる。それは敗者側からと、勝者側からの心境を如実に聞くからである。「どちらの言やよし」と、それを批判するのが、この小論の目的ではないが、日本軍人が、命旦夕に迫った境涯から発した言葉であり、パイルの方は常に「死」と隣り合せの取材活動であるから、「死」を考えるなら、危険の切迫は同じ重さをもって両者に迫る。長い間、私の心のタブーであつた、「沖繩戦実録」を、これ程客観的に、冷静に第三者としての米国ジャーナリストの描述した書に出会った時、それは尋ねあぐねて三年有余の歳月の後にパイルの著書全部を入手した後であつたが、国会図書館にてついに発見し、その場ですぐには精読出来ず、呆然自失していたのを思い出す。

あれ程強い決心をして、パリ入城後、欧州戦線に告別して、祖国へ帰つたパイルには身心共に戦争の影響がにじみ出ていたことは、容易に推察できる。前述の引用文の通り戦争を隅なく体験し、魂まで吸い上げられてしまうような感慨で、戦友と別れ、故国に帰つた彼が、またぞろ太平洋戦に出かけて行く気に何故なつたのか(ここにパイルの私的生活の不幸を詳述せねばならぬけれど、この小論にては略す)。その出征することには、実に尻ごみしていたと思う。その彼が、最

終的にまた太平洋戦線へ出征した。日本人としての関係は、この太平洋戦線へ従軍の時から始まり、直接に彼の記録が迫真の訴えをもって、語りかけてくるのである。

太平洋戦域へ

アニー・パイルの太平洋戦争ドキュメントとしては250ページに過ぎない作品、*Last Chapter* (1945)のみが残されることになったけれど、日本人としてこの作品を読み進んでゆく時、彼の一字一句が、心の琴線にふれて、まことに切実に身にこたえるのである。

太平洋戦争の最初の印象を彼は次のように述べている。

Covering this Pacific war was, for me, like learning to live in a new city. The methods of war, the attitude toward it, the homesickness, the distances the climate—everything different from what we had known in the European War. At first, I couldn't seem to get my mind around it, or my fingers on it. I suspected it would take months to get adjusted.

(太平洋戦争は私にとって、どこか始めて、新しい都会に住みつくのに似ていた。戦争のやり方、その気構え、故郷恋しい気持、距離そして気候、—すべてのものが欧州戦で私が経験したものとは違っていた。初めは、それに心を向けることも、指をつけることさえむつかしいかのように見えた。) *Last Chapter* p.4

と、描写されて太平洋戦域の渺茫^{びようぼう}と拡がるその広さを想像させるのである。それから欧州戦と著しく違う点を、彼は具体的に列挙して示してくれている。

(1) Distance is the main thing. (その距離が超最大な主なもの)

(2) And another enemy out here is one we never knew so well in Europe — Monotony.

(他のもう一つの敵はここではヨーロッパ戦争では全く知ることもなかったもの — 単調さ)

(3) Another adjustment I had to make was in

the different attitude toward enemy. (次にいま一つ私が慣れるのに苦心した事は、敵に対する異った態度である。)

以上の三大特徴について、パイルは新鮮な印象と解説を加えている。

(1) 距離について

これは米国からひどく離れていると言う意味ではない。欧州戦でも故国から遠くはなれているのは、同じことであるが、彼の言わんとしたのは戦場へ到着した後の距離なのである。こちらでは全西太平洋が戦場である。欧州では戦場の距離は、せいぜい何百マイルというのに、ここでは何千マイルという距離である。しかもその間にあるものは海ばかり—一つの島で戦争するにしても、よく考えてみれば、千マイルの距離のかなたである。ある兵の話に島に上陸して三時間戦ってから、翌朝ふと海を眺めた時程、気の滅入ったことはないと言う。

輸送船団は、兵を下すと、再び次の任務に立ち去った後だったので、とり残されたこの兵は孤独やるせなく、がっかりしたのである。彼等の実感を示す一例として、海軍では“Airline Distance in the Pacific” (太平洋における空路距離表)と題した印刷物が発行されていたが、その下の方に“*Our Enemy, Geography*” (我等の敵は地理なり)と書いてあった。

(2) 単調について

これは欧州戦線では知られなかったものである。日本軍がいわゆる「南方ボケ」と呼んだものと同性質のものであるけれど、どこの戦争でも怖しさという点で、単調でないものはないが、とパイルは一応断ってから、太平洋では恵まれた生活そのものまで、単調になってしまうのだ。実感として来る日も、また来る日も暖く、確保された島では食事もいい、郵便物も早い、敵からの危険はほとんどない、といった状態なのにもかかわらず、毎日毎日が果てしない単調が続くと、人間をバカにしてしまう、これを“*Pineapple craggy*” (パイナップル気狂い)にかかると言う。護送される精神病患者の高率に上っていることが、島内や陣中で公然と論じられていた。戦火の下を潜らなくても、破壊からこうむる打撃は

顕著なのである。

(3) 敵(日本兵)に対する異なった態度

パイルが慣れるのに何よりも苦心したのが敵、すなわち、日本兵に対する(欧州戦線で敵に対して時とは)異った態度を、自分自身にも感じたし、他の連中も、ここでは敵が何かしら、人間以外の無気味なものででもあるかのように看なされているのを感じ始めたのである。つまり人によって、油虫とかねずみとかに対して持つあの気持である。彼は正直に告白しているが、ホノルルに到着して直ちに、彼は金網に囲まれた広場に、日本人捕虜の一団が収容されているのを見た。角力を取ったり、笑ったり、話したりしている日本人は、普通人と少しも変らなかつた。それでも彼は最初には、ぞーっとするものを感じ、mental bath(メンタル・バス)を浴びたい気がしたと述べている。

ホノルルまで来て、故国からはるかに隔ってしまったことに、今更ながら感慨をこめて感じ入っている彼、故国から5,000マイルも離れてしまった。そしてドイツ国境で戦っている、あちら側の戦友からは、何と一万二千マイルも隔っているのだと思うと、距離の点で圧倒される思いにかられ、異境に遠くある身の寂寥感がひしひしと、迫って来るものである。

Sidi-bou-Zid⁵や Venafro⁶そして Troina⁷と言った地名が、一万二千マイル隔った、この太平洋側の世界では珍しく思われるように、あちら側の世界でも Kwajalein(クエジェリン)、Chichi(父島)⁸そして Ulithi(ウリシー)⁹というような名は、耳なれないので、パイルには耳新しいものばかりであった。一方の戦争を戦っているものは、他方の戦争には、あまり関心を払わない。そして互いに自分の側の戦争が最悪であって、最も重要なのだと思っている。これも至極もつともな心理であろう。それからマリア

ナ諸島まで一挙にパイルは、ダグラス輸送機で、長い、苦しい旅程を飛んだのである。

マリアナ諸島まで3,500マイルの旅程で着陸するのは、ただ二回だけであった。最初の島が、Johnston(ジョンストン)島という、大洋の中の豆島であった。ホノルルを立つて、四時間程すると、この小さい島が視界に入ってきた。あまりに小さいので、驚いてしまい、一体大洋のただ中の一点みtainなこの豆島を輸送機は、どうして発見するのであろうかと、感に打たれている。そんな小さい島でも、既に大型機の発着できる飛行場が、設備されていて、数百人のアメリカ兵がそこで働いていた。こんな気候のよい所で静かに、しばらく世をのがれて暮すのも悪くはないと彼には思われるのだったが、兵達はもうこの世捨て人の生活にはあきあきし、場所の単調さで神経は、いらいらしているのである。

ジョンストン島を飛び立って、西へ西へとあやめもわからぬ闇の中を、機は長時間とんで、機が高度を下げたなあと感じたのは真夜中すぎから、下方に灯が見え始めた。相当の町らしい燈火である。着陸した所は意外なほど賑やかな空港である。これがマーシャル諸島のクエジェリン島であった。1944年3月から4月にかけて、アメリカ歩兵と海兵隊とが、一万人の日本軍を殲滅し、中部太平洋に、飛石伝いの直線コースを開いた島である。海蜂隊は下水パイプを敷設する時、日本兵の死体を山と掘り上げたのであった。しかし島も、もうすっかり変形して、大航空基地になり変っていた。

ホノルル、マリアナ間の一ばん長い行程を受持ったパイロットは、スカービン海軍大尉であった。大尉は映画撮影が趣味であって、飛行中の壮観のやまを映写機でとるのである。夜明けに大尉はパイルを操縦室へ招いた。外を見れば、太平洋を蔽う雲の綿畑に、今しも暁の陽光がさ

5 Sidi-bou-Zid: 北アフリカの戦場となった町名。

6 Venafro: イタリア戦線の古戦場。

7 Troina: 同じくイタリア戦線の激戦地で山中の要地であった。

8 父島、父島列島は小笠原諸島の中央部。

9 Ulithi: マリアナ諸島中の環状さんご礁で、米海軍艦船の基地として使用された。

しそめるところで、それは素晴らしい絶景であると、見えた。「こんな景色ばかり見て暮していれば、飛行機が好きになるのも不思議じゃない。」と家の者が書いて来たと、彼はこぼしていた。

夜が明けると、間もなく機は無限の空中から、^{ようや}漸くめぐす島にさしかかった。乗員は16名であった—12人の陸海軍の将校達(一人の海兵隊将軍)、3人の応召兵、それにパイルは只一人の民間人ジャーナリストと言うわけ。パイルはジャーナリストとして単身で、1945年2月初旬に太平洋戦争に従軍のスタートを切ったことが窺われるけれど、シシリー島上陸戦にも、ノルマンディ進攻作戦にも、常に多数のジャーナリストと共に征った彼が、どうして、結局彼の最後の征途となった太平洋戦域には、単身で出かけたのか、不審に思われるところである。あれ程友情に厚かった彼が、この書中では一箇所として、同僚ジャーナリストの消息を描いた項が見当らぬのである。そしてその間の事情は Lee J. Miller's "The Story of Ernie Pyle."¹⁰(リー・ミラー著アニーパイル伝)に依るしかないのである。

飛び立つ時は全然速度を感じないで機はぐんぐんと昇ってゆく感じがする。しかし着陸の時は地面が恐ろしい速度で向ってくる。向ってくるものがぐんぐんと速くなる。飛行場全体が、悪夢でもみているように襲いかかってくる。そしてついに機は地上に接触する。滑走路は長かったけれど、スカーヴィン大尉は「せい一杯滑ろう、ブレーキが怪しいから」と言った。次第に速力が緩くなり、操縦棒を引いて、着陸した。かくしてこの巨大な金属の鳥が、不思議な活動状態から、地上の生命のない状態に変化するのに一分間を要した。そこで戸は開かれて、パイル一行はマリアナ諸島の珍しい土の上に降り

立った。

マリアナ諸島の一角に立って

マリアナ諸島は熱帯的であった。見るものが熱帯的であったばかりでなく、何よりよかったのは熱帯的に感じられたことであつたと、パイルは一声を上げている。暦の上では2月と言うのに、いい季節にマリアナへ着いたことを彼は喜んでいる。

ここは15の島が南北に、鎖のように連なり、その延長は400マイルに達していた。米軍はその南端の三つの島を確保しているだけであつたが、それらは群島中最大の島であつた。他島はこの三つの島の占領に依って、完全に無力化されていた。大抵の島には住民はいなかった。1944年の夏、米軍が奪取した島は、Guam(グアム)¹¹ Tinian(テニアン)¹²そしてSaipan(サイパン)¹³であつた。グアムは最大で、最南端にある。サイパンとテニアンはどれも、グアムから北方120マイルにあつて、一時間以内で飛んで行ける。米輸送機は日に数回も、定期的往来をしていた。このマリアナ群島は、もっと南の島々に見られる猛暑と悪疫がなく、ジャングルも存在しない。気候はよく、島は美しく、島民のチャモロスはいい連中である。米軍兵士の健康状態はよく、蚊と蠅の問題は征服されていた。

フィリッピンや中国、そして日本からも1,500マイルも離れたマリアナ群島に、何故米軍隊をおくかと言えば、この広大な距離をもつ太平洋戦では、奪取した島の一つ一つを基地にして、更に未来の進攻のため、食糧物資を備えておかねばならぬ。マリアナは、幸いなことに西太平洋上の一種の十字路に当り、北へも西へもここからは自由に行くことができた。マリアナへ座っていれば、広い太平洋戦の全域へ手をのばす

10 The Story of Ernie Pyle, Lee J. Miller 著「アニーパイルの伝記(1950年出版)。

11 Guam: マリアナ諸島中最大の島で米領である。

12 Tinian: マリアナ諸島中、グアム島北方にあり、前一次大戦後は日本領であつたが二次大戦に米軍は占領した。

13 Saipan: 一次大戦後日本領土としてマリアナ群島の中心をなしたが、二次大戦に米軍が占領、守備隊玉砕の島。

ことができた。米陸海軍の指揮者達はもうそれについて、公言して憚らない。たとえ日本軍がそれを知っても、もはや手出しのできない遠距離にあった。ここには幾千と言う部隊の異った種類がいて、猛烈な工事が進められていた。飛行機はまるでシカゴ飛行場のように定期的に、あらゆる方面から着いていた。輸送船は夥しい物資を陸揚げしていた。マリアナは至極安全であったので、米B29爆撃隊の基地になっていた。もう既に燈火管制はなかった。空襲があれば消されるが、もうめったにやってくる日本機はなかった。

以上の通りのマリアナ群島中の大島グアムに着いたパイルは、未体験の課題三つを抱いて飛来したのであった。すなわち、

- (1) 日本空襲に猛威を振るB29の基地を訪ねて見たい。
- (2) できれば一度空母に乗り込んで、艦載機の発着を見たい。
- (3) できるだけ日本兵について知識を深めたい。

以上の三問題であったと思われるけれど、第三の日本兵を識るという件は一朝一夕の見聞では如何ともし難い難問であった。兵隊の語るところを傾聴し、実戦の海兵隊には実談を幾度か乞うたが、この難題にはついに結論を出し得ず、その解明途中で倒れてしまったけれど、彼の残した断片的な観察、感想はさすがに鋭くて、日本国民性、ひいては日本兵の精神構造の中樞を把握したもので、私達から考えると、学問的な解説よりも、実に示唆にとんだ、反省、教訓を引き出す、魅力あふれた興味深いものがある。

彼はマリアナ諸島中のグアムに到着した。聞くところに依れば、占領してから6か月以上にもなるこのマリアナの三つの島に、いまだ日本兵が残存していたのである。見積りでは数百人はいるだろうとのことだった。日本兵は山中か洞穴にかくれていて、夜になると食物を漁りに出てくる。米軍はもうそれらの敵兵を相手にしていなかった。戦闘訓練部隊が時々演習のつもりで、敗残兵狩りに出かけて、きっと少しずつ引っぱって来た。そして毎日5・6人の日本兵

が投降して来た。

パイルは日本兵への感想を次のように要約して述べている。

The Japs didn't try to practice any sabotage on our stuff. It would take another Japs to figure out why. The Japanese were throughly inconsistent in what they did, and very often illogical. They did the silliest things.

(日本兵は米軍に対して、ほとんど妨害行為をしようとはしなかった。その理由は日本兵に聞いてみなければわからない。彼等のなすことは徹底的に辻褄が会わず、非論理的な事が非常に多いのである。) *Last Chapter*. p. 36

と、総括して記述した後、日本兵の inconsistency (辻褄の合わぬこと) と illogical (非論理的な) の実例を次々にエピソード風に掲載をしているが、この書の圧巻の部分となすところの記事であろう。しかし日本人として読む時に、心中ひそかにうめき声を漏らし、そのうずぎをまた噛みしめて味わってみなければならぬ箇所となる。反面第三人であったなら、定めし、奇妙、不可解なユーモアさえさそう記述に、関心はそそがれるであろう。それ位の妙味のある話が語られる、一

One night some of our Seabees left a bulldozer and an earth mover sitting alongside the road up in the hills. During night, the Japs came down. They couldn't hurt any body, but they could have put that machinery out of commission for a while. Even with only a rock they could have smashed the spark plugs and ruined the carbureter. They didn't do any of these things. They merely spent the night cutting palm fronds off nearby trees and laying them over the big machinery. Next morning when the Seabees arrived they found their precious equipment completely "hidden".

(ある夜、海蜂の一隊が使いかけのブルドーザーと土搬機とを一台ずつ山間の路傍に置きっぱなしにしてきた。すると夜中に日本兵が出て来た。彼

らは人間を殺傷する事ができなかったとしても、その機械を一時使用不能に陥らすことは出来たのである。石塊一つあれば、点火装置を破壊して、気化機を使用出来ないようにする事は出来たのに、ところがそんなことは何もせずに、一晩中かかって、棕櫚の葉を近くの木から切ってきては、この大きな機械の上に置いた。翌朝、海蜂隊が行って見ると、彼等の大事な機械は完全に隠蔽されていたのだ。)

と、一例を揚げて物語っているけれど、これは諷刺に苦しむところの辻褃の合わぬ話である。

また次のような挿話もパイルは記述している。

An American officer was idly sitting on an outdoor box toilet one evening after work, philosophically studying the ground as men will do. Suddenly he was startled. Startled is a mild word for it. For there he was, caught with his pants down, so to speak, and in front of him stood a Jap with a rifle. But before anything could happen the Jap laid the rifle on the ground in front of him and began salaaming up and down like a worshiper before an idol. The Jap later said what he had been hunting for weeks for somebody without a rifle to give himself up to, and had finally figured out that the surest way to find an unarmed prospective captor was to catch one on the toilet!

(アメリカの士官が一日の任務を終えた夕方に、戸外の箱便所でゆっくりと用を足していた。誰でもするように哲学的に地面を考究していた。すると突然彼は、驚いてしまった。びっくりしたと言えはやさしい表現になる。というのは、つまりズボンをおろしたままの彼の面前に、突如、日本兵が拳銃をもって立ち現れたのである。しかしどうなることかと思った途端に、日本兵は拳銃を彼の眼の前の地上に置いて、三拜九拝し出したのであった。後でその日本兵の語ったところによると、彼はどうかして拳銃をもたないアメリカ兵に投降したいと幾週間も探しまわったあげく、もっとも完全な丸腰の捕獲者を見つける確実な方法は、用便中をみつかる事だという結論に達したというの

だった。) I bid. p.25

このようなエピソードを描く時、彼の文体は透明、直截である。この日本兵はドラマの素材そのものを提示している。悲劇にユーモアが屈折して、作者の「語り」の巧妙さが、まず心を捕える。そして後、主観的になって、この新鮮な日本兵に、興味を抱くまでになる。

先の三つの作品においては、慎重かつ真摯であり、人道的視点から、自国の米兵の一人一人の苦闘に、焦点を向けがちであったパイルが、この最後の作品 *Last Chapter* では、日本兵に関する観察や感想を、直接に日本兵個人を見た場合とか、投降の兵隊個々に接した時の記述が、ユーモラスに描かれ、ペンの方が先に走り出した感じの報道を読むのである。「戦争文学」と呼ぶたい深さと、陰影は増し、彼は余裕綽々の境地で執筆に当たった趣を感じ取るのである。

しかし、次の二つの挿話はどうかであろう。長い年月の間、日本国民の心底にこびりついて、眠っていたかのようにみえる、戦時下の夢魔が再び呼び覚まれて、騒ぎ立ち、鎮める術もない位のショッキングを覚えるものである。戦慄を感じないでは読めない話である。

They told one story about a Jap officer and six men who were surrounded on a beach by a small bunch of marines. As the marines approached, they could see the Jap giving emphatic orders to his men, and then all six bent over and the officer went along the line and chopped off their heads with his sword. As the marines closed in, he stood knee-deep in the surf and beat his bloody sword against the water in a fierce gesture of defiance, just before they shot him. What code led the officer to kill his own men rather than let them fight to the death is again something only another Jap would know.

(一人の日本将校と6人の兵隊とが、海岸で海兵隊の一小隊に包囲された件についてこんな話を彼

等は語った。海兵隊が近づくと、将校が何か語気はげしく命令しているのが聞こえた。やがて6人の兵隊が、前かがみになったかと思うと、将校は列の片っ端から、兵隊の首を刀ではねて斬り落したのである。海兵隊が一層近づくと彼は波に膝を没しながら、立ちほだかって、さあ来いと言わぬばかりに血刀で水を叩きつけた。その瞬間彼は撃たれてしまった。彼の部下を死ぬまで戦わさず、自分の手で殺してしまうなどというのは、一体どんな軍規があつてのことだろうか。これも日本兵だけが知る秘密なのだろう。

On Saipan, they told of a Jap plane that appeared over-head one bright noonday, all alone, As obviously wasn't a photographic plane, and they couldn't figure out what he was doing. Then something came out of the plane, and fluttered down. It was a little paper wreath, with a long streamer to it. He had flown it all the way from Japan, and dropped it. "In honor of Japan's Glorious Dead" on Saipan. We shot him down into the sea few minute later, as he undoubtedly knew we would before he ever left Japan. The gesture was touching-but so what?

(サイパンでの話であるが、ある快晴の日のま昼、日本機がたった一機で頭上に現われた。撮影機でないことも確かだし、目的がてんでわからなかった。すると何やら機体から現われて、ひらひらと舞い落ちて来た。見るとそれは小さな紙の花環で、長いリボンがついていた。彼はそれをのせて、はるばる日本から飛来し、「日本の英霊を讃える」ためにサイパン島に投下したのだ。数分後に彼は海中へ射落されたが、もちろん日本を出る時から覚悟の前であつたろう。その態度には胸を打つものがあった。——が、それにしても、やり方が腑に落ちない。) Ibid. p.27

前者を読めば、直ちに日本人なら頭にひらめく「戦陣訓」の一節がある。「汝捕囚の辱かしめをうけず……」と、全く軍人教育の行き過ぎも、ここまでくると、「病膏盲に達す」の感じであるが、敗軍の血気にはやる将校が、パニック状態に追いつめられると、恐ろしい狂態を演ずる

のかもしれない。それから、後者を読むと、当時戦時下の日本中の新聞の論調がまざまざと甦えってきて、背すじがぞーっとするほど、言論は抑圧されて、軍国精神の鼓吹だけが叫ばれた一色に塗りつぶされた世論では、後者のような行為は、万人讃仰の頂点と讃えられたものだ。

伊江島にてパイルが銃撃に倒れたのが、1945年4月18日の午前中であつたので、彼が太平洋戦域で見た事実、聞いた事件は、ほんのわずかの太平洋戦の一端に過ぎぬものである。しかしその一片の事実は、心ある日本人達の精神を揺がし、必ずまたくびすを返して、戦時下の「日本精神史」を、ひもとかしめるに足るものである。日本人の「国民性」とは？「国体」とは？等々に想いを馳せしめるに十分な緒をもつものである。それはまた東洋の一角に異質の文化を築き上げた日本人の内省の発端ともなっていく資料を提示してくれる。

パイルはマリアナに座って最後には以下のような言葉を吐いたのである。日本国民性の急所をついた名言とも思われるものである。「私は日本兵がいかに手強いのか、そして又いかに間がぬけているか、という話をうんと聞かされた。いかに非合理的で、また、時にはいかに気味のわるい程スマートにやるか、一つ崩れ出したら手もなく混乱するが、それまではいかに勇敢であるか、といったことを、それは物語っていた。」と、述べているのである。

沖繩進攻作戦

それから、よく考えてみるなら、彼の胸中に潜んでいた最大の、そして最後の宿題とも見なされる件がある、恐らくそれは、今回が最後と考えられる、米軍の沖繩進攻作戦に挺身して、参戦し、兵隊と同時にまた同様に上陸舟艇に乗り込み、第一日目に沖繩上陸を決行してみる、決意が当然秘められていたと思う。ノルマンディ進攻作成では、あの血まみれの修羅の海辺に、彼が到着したのは、整理上第2日目の上陸であつたから。

さて米軍の沖繩進攻作戦は、どのようにして、

敢行されたのか、実に日本人として、日本領土の一部に敵兵が上陸を完了した事だけでも、関心の的であったはずなのに、九州からは最短の距離にあり、肉親を戦隊長として彼の地へ送り出した私には、片時と言えど脳裏から離れたこともない沖縄戦局であった。その沖縄進攻作戦の詳細が知りたいと長年宿願にしていたが、それがパイルの詳述に依り、叶えられる事になったために、この作品を入手し得た時の感動は、また格別のものであった。パイルはゆうに一章を費して、この沖縄進攻作戦の詳細な順序、規模そして模様を、一大パノラマを眼前に髣髴させる程、雄揮なペンを走らせて、描写している。と同時にこの壮挙に参戦している彼自身の心理を、現象が変化するごとに「独白」の形で、彼が刻々に綴って記録に留めているのが、実に稀有な体験のため、この書の価値を倍増していると考えられる。生前にかつて批評家が、「彼の文章のスタイルは、バイブルの文章によく似ている」と述べた時、パイルはそれに敢えて何の答もなさなかったけれど、今熟読を重ねてみて、そのことを切実に思うのである。これは母国の銃後の人々に宛て書かれた記録、報道であるが、既に彼の作品は香りの高い歴史的記録になってしまっている。文学書とみて読んでも、十分な芸術味を感じさせる傑作である。沖縄進攻の上陸開始前の二時間、洋上の米軍は、陸海空20万の大軍、1,500隻の大艦隊が集結して、復活祭の日曜の暁頃、夜のとばりが拭い去られて、東洋の海上が明けそめる、みると、あらゆる護送艦船がここに集結して延々数マイルに及ぶ一大艦隊を形成していたのである。そのような光景をパイルは、簡勁な、しかし荘重な筆で明らかにしている。

先攻は艦砲射撃、船中では毒蛇の話も出た。前夜ドルを「円」に換え、晚餐には七面鳥のご馳走が出たが、“Fattening us up for the kill.”(殺す前に太らせる)のだと、兵隊は冗談を言っている。上陸する日を普通、軍では、D-dayと公称しているが、兵隊は勝手にLove dayと改称してしまう。多分復活祭の日曜に上陸するので、誰かが同胞愛精神を感じたというわけなのだろう。

う。夜半に甲板に出ると、輸送船は多数の上陸用舟艇をそこに積んでいた。起重機がそれらを舷側の外へ釣り出す手筈になっていた。丁度夜が明け初めた頃、これらの舟艇は兵隊を乗せて、winchで海面に下されるのである。

An assault on an enemy shore is a highly organized thing. It is as intricately organized that it would be impossible to clarify all the fine details. No single man in our armed forces knew everything about an invasion.

But, to simplify one thing, suppose we were invading an enemy beach on a four-mile front. It would not be one overall invasion, but a dozen or more little invasions, going on simultaneously side by side. Each combat team runs its own invasion, and a combat team is a regiment.

(敵前上陸は極度に組織的なもので、細部にわたって説明することはとても出来るものではない。この侵攻作戦の全貌を知っている人間は、恐らくこの部隊に一人もいなかったろう。

しかし唯一のことを掻いつまんでいえば、我々は敵前四マイルにわたって侵攻しつつあったということである。しかもそれは一つの全体的な侵攻ではなく、12ないしは、それ以上の小侵攻が隣り合って、同時に行われるのであった。) Ibid. p.98

と、まず、進攻上陸の組織作りについて述べているので、全貌の鳥瞰図を大体に想像することができる。沖縄上陸開始の1時間30分前、米艦隊の巨砲は一斉に火を吐いたという。砲撃は1週間前からつづいていたが、その朝の集中砲火の烈しさは前例を見ないものであった。

“……The power of the thing was ghastly. Great sheets of flame flashed out from a battery of guns, graybrownish smoke puffed up in a huge cloud, then the crash of sound and concussion carried across the water and hit you. Multiply that by hundreds and you had bedlam. Now and then the smoke from a battlewagon would come out in a smoke ring, an

enormous one 20 or 30 feet across, and float upward with perfect symmetry.

(凄じい勢いであった。巨大な焰が閃くと、灰褐色の煙が巨大な雲の塊になって、飛び出す、瞬間轟音と震動とが水をつたって、我々を打ちひしいた。それが何百回となく反覆すると、気がふれそうになる。時おり、軍艦から煙が上る、大きいのは直径20フィート前後の完全な形の煙を描いて上昇して行くのである。) Ibid. p.98

上陸決行は午前8時30分と決まっていた。8時までに諸命令が放送され、「第一、第二の波状隊の出動を急げ！」という声が海上に響きわたった。最初の隊は、重砲と水陸両用戦車だけからなっており、上陸と同時に沿岸のトーチカを攻撃するのであった。その直後に続くのが第二隊で歩兵の先陣であった。10分おきに舟艇の波がおしよせるのである。このような切迫した周囲の状況とは裏腹に、パイルは指揮船に乗り込んでいて、つくづく惨めさを感じ、心臓は押しつぶされそうで、“There’s nothing whatever romantic in knowing that an hour from now I may be dead.” (今から1時間もしたら死ぬかも知れぬとわかっていて、ロマンチックなものなど微塵もなかった。)と、率直に弱音を吐いているのである。他方、私は敵、味方を忘れさせるこの戦記のクライマックスに惹きつけられて、手に汗握る心持で、名文に没入していた折に、彼の心中の「不安の独白」は、はっとしてその都度私を日本人に返らせる。

上陸の際に、日本軍の反撃抵抗をさぞかしと覚悟していた米軍に対して、日本側の反撃は、全く皆無であった。いや、むしろあっけなく感じる程であった。“Hell, this is just like one of Mac Arthur’s landings.” (やあ！これじゃまるでマッカーサー将軍の上陸じゃねえか！)という。ユーモアの一声を兵隊が上げたのである。

It was all very indefinite and yet it was indicative. The weight began to lift. I wasn’t really conscious of it, but I found myself talking more easily with the sailors and somehow the feeling gradually took hold of me that we were to be

spared. The 7th wave was to pick us up as it came by. I didn’t even see it approaching. Suddenly they called my name and said that the boat were alongside. I grabbed my pack and run to the rail. I’m glad they came suddenly like that. the sailor shouted, “Good luck!” over and over and waved off. We were on our way.

(一切が未だ不安定であったが、暗示的ではあった。自分では気がつかなかったが、気持ちが軽くなり、思わず水兵と話が弾んだし、どこか救われたと言う感じがしだいに私を捕えた。この時第7隊の番がきて、我々をつれに來た。私はその一隊が近づくのも気がつかなかった。突然自分の名が呼ばれて、舟艇がよこずけになっていると知らされた。私は荷物を掴むなり手摺に走り寄った。こんなふうに突然に自分の番が來たのは却ってよかった。水兵達は「御機嫌よう」と叫んで何度も何度も手をふった。) Ibid. p.100

これが沖繩上陸戦の実況である。その間日本兵はどうしていたのか？多くの洞穴を拠点として、たてこもっていた日本軍の特攻隊は、(舟艇を改造した船舶特攻隊となっていたが)夜に、暗夜にまぎれて、特攻々撃をかけたのである。また洞穴から出て、日本兵はゲリラ戦で抵抗し、随所に激戦を展開して、本土決戦が予見される、三か月間を防波堤の役目をして、譲らなかつたのである。結局本土を守るための犠牲となつたのであるが、この三か月の延引は貴重であつた。米軍の本土攻撃が、もしも沖繩でやつた組織で行われていたなら、日本本土は惨憺の極みであつただろうに。

沖繩戦では日本側の戦死109,629人、米軍の捕虜となつた者7,841人、米側もまた7,613人が戦死、5,8018人が負傷した。制空権の奪れてしまつた沖繩海岸では、船舶特攻隊(前述の)が、米軍艦13隻を沈め、174隻が損傷を受けている。私の肉親の率いた船舶部隊は難所の南部で活躍し、戦果も上げた事を、日本人側の実録が留めている。

パイルの報道した沖繩戦は、ほんの17日間の実戦状況であり、その一端にすぎぬことを前に再度にわたって、断つてきたが、あの不撓不屈

の精神の人もついに、沖縄において17日目に不帰の人となったことを考えれば、日本兵の反撃、抵抗が皆無であったとは、言い過ぎの言葉となるであろう。この致命的事実に証拠は十分に現われているからである。

幾度となく、パイルは、“Never before had I seen an invasion beach like Okinawa. There wasn't a dead or wounded man in our whole sector of it”（とにかく沖縄のような敵前上陸の光景に接したのは初めてであった。見渡す戦線一帯には一人の死者も負傷者もないのである。）と記述し、心だけは救われたように穏やかに、その夜は沖縄の残壕の中で寝についたが、猛烈な蚊の来襲に遭って、安らかな眠りは得られなかったと結びの文章は綴られている。

参考文献

1. Ernie Pyle, “*Last Chapter*,” Henry Holt and Company, N. Y. (1946)
2. 瀧口修造（訳）『最後の章』青磁社（1950）
3. Ernie Pyle, “*Brave Men*,” : Henry Holt and company, N. Y. (1944)
4. Lee J. Miller, “*The Story of Ernie Pyle*,” : The Viking Press, N. Y. (1950)
5. 吉田 満『戦艦大和』中央公論社, (1960)
6. 鶴見俊輔『戦時期日本の精神史』岩波書店 (1982)
7. 池田哲郎『日本英学史風土記』篠崎書林, (1981)
8. Ernie Pyle: “*Here is Your War*,” Pocket Book Edition (1943)
9. Ernie Pyle: “*Ernie Pyle is In England*,” Pocket Book Edition, (1942)